

その旋律を

彼方から聞こえてくる、その音は
願いを求める英雄たちが集い
誰も知らない戦いが始まろうとする合図。
その激しい濁流に巻き込まれ
踏みにじられてしまう小さな花。
遠くから響く雷鳴。静かに轟く地鳴り。
どこからか少女の唄が聴こえる。
それは、寂しさに耐えられず叫んでいるようで、
ひとりぼっちで泣いているようで……。
悲しげな少女がひそやかに守りたかった、
ささやかだけど、かけがえのない日々が
壊されてしまうときの予兆の旋律。

世界はきしみ、戦いはひずむ。
すべての力を失い、抱いた願いをなくし、
行くあてのなくなった彼女は
そのとき内なる声と出会った。
彼女の悲しみと静かな怒りが反転し、
染みのように冷たい影を落とす。
すべてをのみ込む漆黒の暗闇が生まれた。
そして、物語は次の章へと向かう。

劇場版
Fate/stay night [Heaven's Feel]

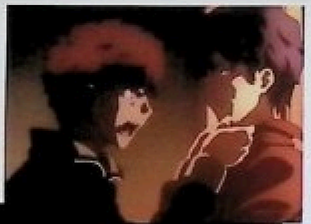
●第一章「presage flower」全国公開中

WEB▶ http://www.fate-sn.com/
Twitter▶ @Fate_SN_Anime

illustrated by ARISA MITSUI
painted & digital works by ufotable
text by HIDEKUNI SHIDA

セイバー

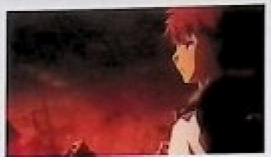
衛宮士郎が召喚した「最優」とうたわれる剣士のサーヴァント。己の過ちを正すために聖杯を欲し、そして自身の深層と対峙することに



心の変化

慎二は桜を取り戻そうと衛宮家を訪れる。桜のほおを打つ慎二の態度を目撃して、怒りに突き動かされる士郎。士郎にとって桜は守るべきものになっていた。既視の映像が、桜と士郎の感情の変化を静かに印象づけていく。







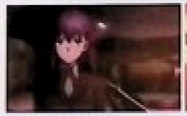
立ち戻る夢

衛宮士郎は10年前冬木市で起きた大火災に巻き込まれ、たったひとりで生き残ったという過去があった。士郎が日常を送っているとふいに大火災の記憶が甦る。……まるで士郎に幸せになってはいけないととどめるように。

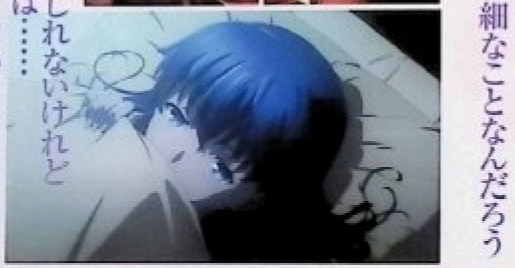




小さなことかもしれないけれど
変化したところは……
自分のカギをあまり
使わなくなったことだと思う



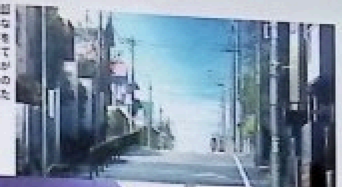




オレがそう望んだ
たぶん、些細なことなんだろう

それから季節が流れ
肩のケガが治っても
その生活は変わらなかった
桜がそう言いだしたのか

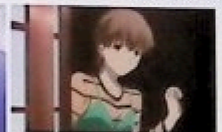
桜はケガをした士郎の家に通うようになり、いつしか家事を手伝うようになっていた。士郎のケガが完治してからもその日々は続いていった





最初は不器用で家事も下手だった。だが根気良く繰り返し、少しずつ上手になっていく。料理の腕前もいつの間にか士郎に匹敵するほどに。そんな姿を士郎はほほ笑ましく見守る



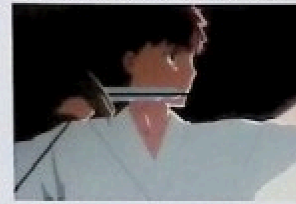




天涯孤独となった士郎の保護者役・藤村大河も桜を家族の一員と見るようになる。だが、桜の兄である間桐慎二は快く思っていない。慎二は士郎に厳しく当たるが、士郎は受け止める



中学で弓道部に入部し、将来を有望視されていた衛宮士郎は不慮の事故で肩を負傷してしまう。休部して自宅にいた士郎の前にひとりの少女が現れる。それは友人の妹・間桐桜だった



あの雨の日に……

劇場版『HF』は「聖杯戦争」の1年半前から描かれる。冒頭のシーンは台詞がほとんどついておらず、環境音で構成されている。主題歌「花の唄」のフレーズがわずかに流れるのみ。

そう、思い出した。
1年半前のあの日
予想外に頑固な年下の少女に
オレは負けたのだ——

壮大な世界観と2人の閉じた世界



間桐桜

魔術師の一族・間桐家の少女。衛宮士郎を先輩と慕い、毎朝夕衛宮家に通っている。聖杯戦争に巻き込まれた士郎の身を案じるが……

音楽
梶浦由記

桜の心情を歌った「花の唄」のメロディ

——劇場版「Fate/stay night [Heaven's Feel] I. presage flower」の劇伴制作お疲れさまでした。完成したフィルムの感想はいかがでしたか。

梶浦　すごかったですね。絵コンテを編集した映像に合わせて劇伴をつくっていたので、キャラクターたちがどういう表情をしているかまでは細かくわかっていなかったんです。だから、完成した映像を見たときに、ここまで美しいものとは正直、わかっていませんでした。特に想定外だったのはバーサーカー戦ですね。バーサーカーが怖い(笑)。この作品でバーサーカー戦は最初の戦闘ですよね。サーヴァントってこんなに怖いんだと改めて感じました。赤いし、大きいし、速い。「これには勝てない」という最初から絶望が襲ってきました。衛宮士郎がいかに絶望的な戦いに向かっているかという重みを如実に描いているなと。夢に見てしまいそうなシーンでした。

——劇伴制作にあたり、スタッフとどんな打ち合わせをしましたか?

梶浦　脚本などの資料をいただいて、まず劇伴よりも先に主題歌の打ち合わせをしたんですね。Aimerさんに歌っていただくために主題歌を先につくってしまおうと。まず「花の唄」をつくったんです。Aimerさんの声は心に食い込んでくるような印象があったので、内側に響くことばを乗せたいと、間桐桜の想いに踏み込んだ歌を書きました。

——Aimerさんとのレコーディングはいかがでしたか?

梶浦　歌の演出をご自分でされる方には、どう歌うかのプランニングはお任せしたほうがいいと思っているので、私は「好きに歌ってください」とだけお伝えしました。もちろん何度か歌っていただいたのですが、歌詞が聞き取りにくい部分など、本当にささやかな部分だけを調整したくらいで楽曲の本質的な部分はAimerさんがつくり上げてくださったんです。

——「花の唄」のメロディを今回の劇伴ではメインテーマとしてお使いになっていますよね。

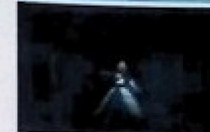
梶浦　はい。ufotableさんの音楽打ち合わせでは「主題歌のメロディを劇中に流して、主題歌もひとつの作品にしたい」とご注文を受けることも多いんです。そういった場合、歌い手さんの声質によってはBGMにも流用できることを前提にメロディを組み立てることもありますが、今回はAimerさんのお声を考えたうえで、まず劇伴での用途は考えずに歌からつくりました。「花の唄」が完全にでき上がってから、その後に劇伴のことを考えたんです。「花の唄」のAメロ(初めのメロディ)を[illegible]ではなく、[illegible]かなとか、Bメロ(サビ前のメロディ)はメロディアスなので弦で弾こう、とか。サビのメロディは拍子を変えて、かなりヒステリックな感じにしてオープニングとラストバトルに使おう、とか。そうやって作品のいたるところに「花の唄」を仕込んでいきました。「花の唄」が流れるのは主に士郎と桜のシーン。結果的にこの作品のメインテーマ的な立ち位置になりました。

——『HF』は「桜の物語」。桜の心情として「花の唄」のメロディがちりばめられているんですね。

梶浦　「Fate」シリーズは壮大な世界観の物語で、音楽をつくるときは広い世界観をイメージしながらつくることが多いんです。でも、今回の物語は「Fate」シリーズのなかでも異質で、桜と士郎が寂しげに閉じた空間にふわっと浮いていて、薄暗い中に2人にスポットライトが当たっているようなイメージがあったんです。そのスポットライトの向こう側には、ものすごく広い背景があって、不穏なものや、派手な流れ星が濁流のようにうごめいている。今回、サーヴァント同士のバトルとか、いろいろな派手なシーンがあるんですけど、それはあくまで舞台装置だと思うんです。その激しさが彼らの周囲で描かれるほど、2人の寂しさや寄る辺なさが浮き彫りになってくる。『HF』はそういう物語なんだろうなとイメージしていました。

——劇伴制作において、音響監督をはじめとするスタッフからどんなリクエストがありましたか?

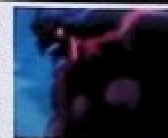
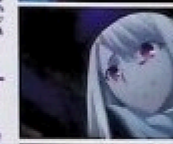
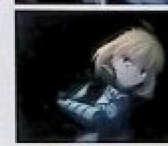
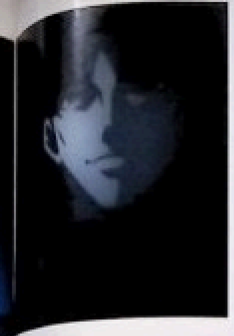
梶浦　「バトルシーンははっきりと派手にしたい」というリクエストがありました。やはりひとつの作品として見せ場はきっちりつくりたいと。バトルを派手にすることで士郎や桜の寂しさを際立たせたいという思いも、私のほうにありましたので、サーヴァントが戦うシーンの一部はしっかりとエンターテインメントにしようと、カッコいい音楽をめざしていました。


サーヴァントが覚えているわけないわね……。お話は終わった？

やっちゃえ、バーサーカー　イリヤ

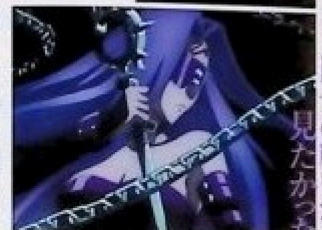
あらゆる願いを叶える、という万能の願望機・聖杯を巡り七人の魔術師と七騎の英霊が戦う「聖杯戦争」が人知れず開幕。セイバーを偶然召喚した士郎の前に、イリヤスフィールのバーサーカーが現れ襲いかかる


ライダーと「聖杯戦争」に参加していた慎二。士郎に戦いを挑むが、セイバーはライダーを一撃で倒す。驚き戸惑う慎二は祖父の間桐臓硯に救済を言い渡される

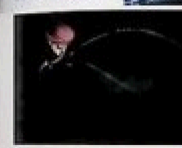


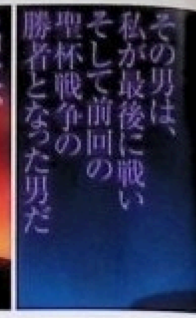
俺はサーヴァント同士の戦いが見たかったんだよ　慎二



聖杯戦争の戦い方

「Fate/stay night」の世界は英霊（サーヴァント）たちの人知を超えた戦闘シーン。梶浦はオーケストラやクワイアを入れた荘厳な曲で戦闘シーンをさらに盛り上げる。なかでもセイバーの戦いは華々しく彩られた。



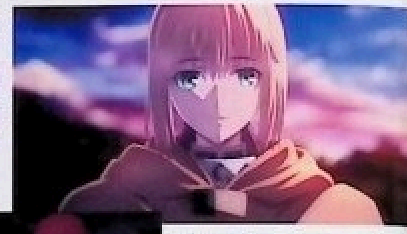
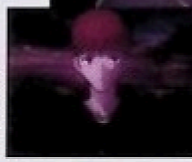


その男は、私が最後に戦いそして前回の聖杯戦争の勝者となった男だ

名は、衛宮切嗣という　綺礼



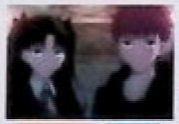
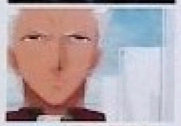
「聖杯戦争」の監督役の言峰綺礼から、10年前の「聖杯戦争」の真実が明かされる。それを知った士郎は、葛藤しながらも、改めてセイバーと「聖杯戦争」に挑む覚悟を決める

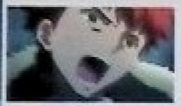
初めて知る真実

10年前の大火災で士郎の命を救った養父・衛宮切嗣。彼は前回の「聖杯戦争」の参加者だった。彼はセイバーを召喚し、聖杯を手にする寸前にいたのだが……。過去が明かされたとき、切嗣の戦いを描いた「Fate/Zero」の劇伴が流れる。

私の過去に何があろうと刻まれた令呪は今のマスターと私をつないでいます　セイバー

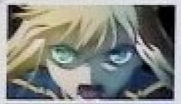
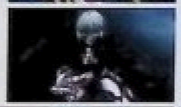
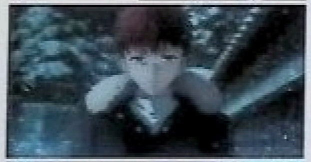

未熟な魔術師である士郎は、桜を守るために遠坂凛と行動をともにする。やがて2人は共闘して「聖杯戦争」へ挑むことに。凛が召喚したアーチャーは反対するが、凛は反論を却下した



途切れたきずな



そうか。つまり、俺は正真正銘、マスターではなくなったのか……　士郎


時間の流れの重みを感じる瞬間



衛宮士郎

正義の味方になることをめざす少年。かつて衛宮切嗣に命を救われ、養父の理想を誓う。偶然セイバーを召喚し、聖杯戦争に参加する

——バトルシーンの楽曲で、印象的なものを挙げるとすると、どのシーンに流れる楽曲になりますか？

梶浦　今回の脚本ではセイバーのカッコいいシーンがとても少ないんですよね。唯一の見せ場と言っていいのが序盤、墓地で戦うシーン。でも、あのシーンは前口上は長いんですけれど（笑）、戦闘自体はすごく短い。「短いシーンであってもヒロイックに盛り上げて、きっちりと彼女の見せ場にしたい」というリクエストをいただいたので、コーラスを入れて一気に盛り上げて一気に終わるような曲にしてみました。短くはあっても華々しくしてあげたくて。

——ランサーと真アサシン戦は、音楽と効果音だけで構成されているアクションシーンでしたね。

梶浦　「音楽でも魅せてほしい」とも言っていただけたシーンでしたので頑張りました。シチュエーションごとに分かりやすく曲を分けてフィルムスコアリングならではの展開ある楽曲になっています。

——本作には士郎の養父・衛宮切嗣が登場するシーンがあったり、「Fate/Zero」の流れを汲むシーンもあったかと思います。

梶浦　打ち合わせのときに「切嗣が出てくるシーンでは「Fate/Zero」の音楽を流しましょうか？」と相談したんです。そこで「流したほうがいい」という判断をいただいたので、堂々とわかりやすく音楽をつけさせていただきました。とても嬉しくて。[illegible]

る」はもう6年前の作品ですよね。でも、その時間の長さって、士郎が切嗣に救われてからの10年に感覚として近いと思うんです。士郎が10年前の切嗣の思い出を振り返るように、「Fate/Zero」を思い出してもらえるといいのかなと。「Fate/Zero」を当時リアルタイムでご覧になっていた方に士郎の気持ちを疑似体験していただけるとうれしいなと思います。

——[HF]という作品は第二章、第三章に続きます。次に向けて梶浦さんはどんな心境ですか？

梶浦　実は今後の劇場版[HF]の次の展開が実際にどうなるのかは、まだ私は知らないんです（笑）。とにかく桜が幸せになってほしいと思っています。

——そして劇場版「空の境界」から10年。この10年の積み重ねが本作に反映しているのだと思いますが、梶浦さんにとってこの10年の積み重ねはどんなものだったのでしょうか。

梶浦　ufotableさんとのお仕事は10年前も現在でも変わらず、いつもワクワクするんです。「この映像に音楽をつけてください」と言われて、映像を拝見したときに「もう、これに音楽をつけられるなんて！」とうれしい気持ちになります。ufotableさんとは毎回、すごくていねいな打ち合わせをさせていただいて「ここの場面では観客にこういう気持ちになってもらいたい」とすごく具体的なリクエストをいただくことができるんです。だから、「なるほど、ならばこういう曲かな」と自分でも納得し、計算しつつ音楽をつくることができるんですよね。とてもやりがいがありますし、一作一作いつも楽しいです。劇場版「空の境界」は全七章＋終章の作品をすべてフィルムスコアリングで劇伴をつくらせていただいて、音楽のつくり方で学んだことがとても大きくて、そのときに試行錯誤したことが今に生きていると思います。やっぱりフィルムスコアリングって楽しいんですよ。おこがましい言い方ですけど、演出家になったような気分が味わえる。ここでセリフが来るなら、音楽はこうしようとか、見ている人の息がふっと止まるような瞬間にしようとか。いろいろな策略を練って、音楽で演出ができるんです。映像づくりに参加しているような気持ちになります。私自身の創作のつくり方も変わりましたし、劇場版「空の境界」がきっかけとなってKalafinaというユニットも生まれましたし。数えきれないほどいい影響をいただきました。

2017.10.14　初日舞台あいさつ＠東京 新宿バルト9

総勢10人のキャスト&スタッフが登壇



公開初日、スタッフとキャストが登壇する舞台あいさつイベントが東京・新宿の映画館で開催された。登壇した顔触れは監督の須藤友徳、キャラクターデザインの碇谷敦、撮影監督の寺尾優一、美術監督の衛藤功二、制作プロデューサーの近藤光、衛宮士郎役の杉山紀彰、間桐桜役の下屋則子、セイバー役の川澄綾子、言峰綺礼役の中田譲治、ランサー役の神奈延年の10人。本編上映後に開催されたイベントだったため、各シーンに込めた演出の意図やスタッフ&キャストの奮闘ぶりが次々と語られ、会場は大いに沸いた。約40分のトーク後、壇上にAimerが登場。ピアノの演奏をバックに主題歌「花の唄」を披露した。その感動的な歌声に、来場者たちは聴きほれたようす。鳴りやまない拍手のなか、舞台あいさつは終わった。



「桜の崩壊する日常」を描いたという第一章。桜と士郎の出会いや日常を描く前半のシーン（アバン）は、カメラワークを極め抜いているという。スタッフのこだわりが伝わってきた